

親切であふれる世の中に

兵庫県 瓦林小学校

6年 竹葉 ひかる

お菓子工場の見学から、母と帰るときのことです。電車で揺られていると、次の駅から手押し車を押したおばあさんと、おばあさんを後ろから支えるようにして、娘さんが電車に乗ってきました。

4、5駅過ぎて、おばあさんと娘さんが降りようとしたとき、立ち上がるのもおぼつかないおばあさんの片手をつかみ、もう片手に手押し車を抱えてフラフラしている娘さんが目に飛びこんできました。

(娘さんの細い体でおばあさんを支えきれんのだろうか？いや、このままじゃ二人とも倒れちゃうよ！！)

そう思ったとき、となりに座っていた母が、さっと席を立ち、持っていた荷物を私に任せて、二人の方に寄っていきました。そして、おばあさんの後ろから両わきを抱え、娘さんには、手押し車を持って先に降車するように伝えていました。

娘さんは、最初は母の助けをこぼんでいるようでしたが、一人では無理とわかり、電車から先に降り、ドアのところでおばあさんと母を待っていました。母は、両わきを抱えながらおばあさんに声をかけ、彼女のペースで、ゆっくりゆっくりドアに向かって歩いています。

私は、おばあさんが無事電車から降りられるよういつつも、おばあさんといっしょに降りていく母が、再びこの電車に乗ることができなかつたらどうしよう？と、ドキドキしていました。

最終的に、無事おばあさんは電車から降りることができ、母も私のとなりに戻ってきてくれました。電車が発車してからも、おばあさんと娘さんは、ホームでペコリと頭を下げていてくれました。

私は電車の中で、母に聞きました。

「ねえ、どうしておばあさんたちを助けようと思ったの？」

母は、「思うも何も、体が勝手に動いたんだよ。」と言いました。

母は、私の生まれる前から、祖父母の介護をしていました。だからあの光景を見たとき、何かを思う前に、本当に体が自然に動いたのだと思います。

私は、母の行動から学びを得ることができました。なにも難しいことをするのではなく、自分のできることを見つけ、行動に移すのです。そして、自分の周りにも、自分ができることはたくさんあるのではないかと、ということにも気づきました。

本当に、本当に、小さな親切ではあるけれど、ちょっとした親切が集まれば、あたたかくて、すてきな世の中になるのではないのでしょうか？

この世の中が、親切であふれますように。